芽室山の会と伏美岳

上嶌　寛（芽室山の会）

芽室山の会の創設と、芽室山の会で整備した伏美岳について紹介します。

１　芽室山の会の創設

ソニーから世界で初めてトランジスターテレビが発売され、神武景気を超える岩戸景気で日本が盛り上がっていた昭和 35 年、芽室山の会は創設されました。

昭和 30 年頃から、芽室町役場や帯広信金芽室支店などの職員に熱心な登山愛好者がいて、一部の間で登山がブームとなっていました。この愛好者のうち、当時 23 歳の岡田浩良さんが中心となって、仙庭昇さん、戸田房男さん、大鐘延弥さん、塚本信勝さんなどが、芽室体育会にあった山岳部を同好会組織として独立させ、各職域、同好会グループなどに合流を呼びかけ、登山活動の活性化をはかり一般への登山普及推進を目的として、昭和 35 年４月８日に芽室山の会を創設しました。

会員数は 80 名ほどに及び、然別湖や狩勝付近の探勝などのハイキング的な山行とともに、大雪山系、日高山系、夕張山系などに足を伸ばし、町内の登山熱は一層の高まりを見せました。当時は自動車も少ない時代で、汽車を利用したりトラックに運んでもらったりして山に行っていました。登山の他にも、山岳写真展、山岳映画会、幻灯の夕べ、冬山訓練会を計画するなど、活発な活動が展開されました。

昭和 36 年６月 17、18 日の両日には、会と北海タイムス社共催で初の芽室岳山開きが、122 名の参加のもとに行われました。芽室岳は清水町内の山ですが、会と同じ芽室の名が冠されていることから企画されたものでした。女性 30 名の参加もあり、登山に対する女性の関心の高まりを感じられた山開きでした。その後もこの山開きは続けられ、年々女性の参加が増加していきました。

初の芽室岳山開き（昭36.6）

２　伏美岳への道

芽室山の会創設当時、芽室から日高の雄大な山並みを眺めることはできましたが、芽室から日高の山に登ることは容易ではありませんでした。当時ピパイロ岳に至るルートは、ピパイロ川を遡行するルートか、日高側からの縦走でした。沢ルートは八ノ沢出合いの約 700m 手前まで自動車で行けましたが、そこから山頂まで８時間ほどかかるうえに、７月中旬まで長大な雪渓がかかり、増水、雪崩などの危険も伴いました。いずれのルートも健脚と熟練を要するもので、難易度の高いものでした。

一般の登山普及を目的に始まった山の会でしたから、皆が安全に日高の山を楽しめるようにしたいとの強い思いがありました。創設時の勢いもあり、美生川支流のニタナイ川上流から尾根つたいにピパイロ岳を目指す安全な登山道づくりが、会員の岡田さん、仙庭さん両名の発案により、会が創設された翌々年の昭和 37 年に始まりました。

しかし、会員はサラリーマンや農業者で構成されており、頻繁に山に入ることはできません。どうしても仕事の合間や天候を見計らってのことになりますので、年間 10 日ほどしか作業できず、なかなか思うように進みません。当時作業に携わった会員は「何度止めたいと思ったことか…」と回想されていました。作業は４～５人で行うことがほとんどでしたが、時には芽室高校山岳部にも手伝ってもらい 10 人規模のこともありました。開始当初は林道もない状況で、作業現場まではテントを担いで沢を遡行し、作業に２日以上かかることもありました。登山道づくりは、５月の残雪期に山に入って赤いテープを枝に付けておき、雪解け後、それを目印に進められました。熊の縄張りに踏み込んでいるわけですから、当然その糞や足跡は頻繁に見られました。沢の中に黒い塊があり、鹿かなと思ったら熊だったということもありました。その後トムラウシ林道が奥地まで整備され、現場に到達する時間にも余裕ができ、作業に多くの時間を費やせるようになりました。

ピパイロ岳への登山道は尾根をたどって進んでいきましたが、1,731m の妙敷山が目線の高さになっても、尾根はさらに上に続きました。地図上ではその先に 1,792m の表示があるのみの無名峰があり、作業はその上を通過します。目指すなら名前があった方がいい。登山口付近の地名が伏美ということから、その名にあやかり「伏美岳」と命名しました。1,792m の無名峰は、我らが「伏美岳」となり、作業の張り合いになりました。後に営林署を通じて国土地理院の５万分の１の地形図に山名と登山道を記載していただきました。

道づくりを始めてから 18 年後の昭和 52 年 10 月、岩が露出したピークまで登山道がつながりました。伏美岳のピークです。眼前には北日高山群、中部日高山群、十勝、夕張、大雪の山群が大パノラマを形成し、それは岳人の胸の高鳴りを覚える光景です。この感激に一同抱き合い、血豆のできた手で固い握手。誰からともなく万歳の声が発せられました。18 年の苦労が報われた瞬間です。下山してからの乾杯の酒の味は格別であったことは言うまでもありません。

また、昭和 52 年には、国有林内の敷地を借り、町事業で山小屋が建設されました。勾配のある三角屋根をもつ２階建ての山小屋は30人宿泊できるスペースがあり、隣にはトイレも設置され、緊急時の避難場所として安全登山に大きな役割を果たすようになります。昭和 53 年からは、伏美岳を町民により親しんでもらおうと伏美岳町民登山を開催し、多くの町民が頂上に立ちその展望に心を打たれました。

その後も作業は続き、伏美岳からピパイロ岳までの登山道づくりに取り組みました。日高特有のやせ尾根の上にクマザサ、ハイマツが密生し、勾配もきつく難作業が続きました。そして昭和 59 年８月、伏美岳からピパイロ岳までの約９km に登山道がつき、安全に日高を楽しみたいとの目的で始まった登山道づくりは、25 年の歳月を経て完成しました。

３　平成 28 年の大雨被害

平成 28 年８月中旬から台風７号、11 号、９号が続々と北海道に上陸し、さらに前線を伴う降雨と台風 10 号の接近により、北海道東部を中心に河川氾濫や土砂災害が発生しました。芽室町では芽室川が氾濫し住宅地が冠水、日高山脈も各地で崩落が発生し、伏美岳登山口へのアクセスの良さを支えていたトムラウシ沢林道も大きな被害を受けました。

林道ゲート

沢筋は大きく削られている

被害を受けていない箇所もあり

水が走る場所はぐられている

大規模に崩壊した場所

流木を利用して渡渉

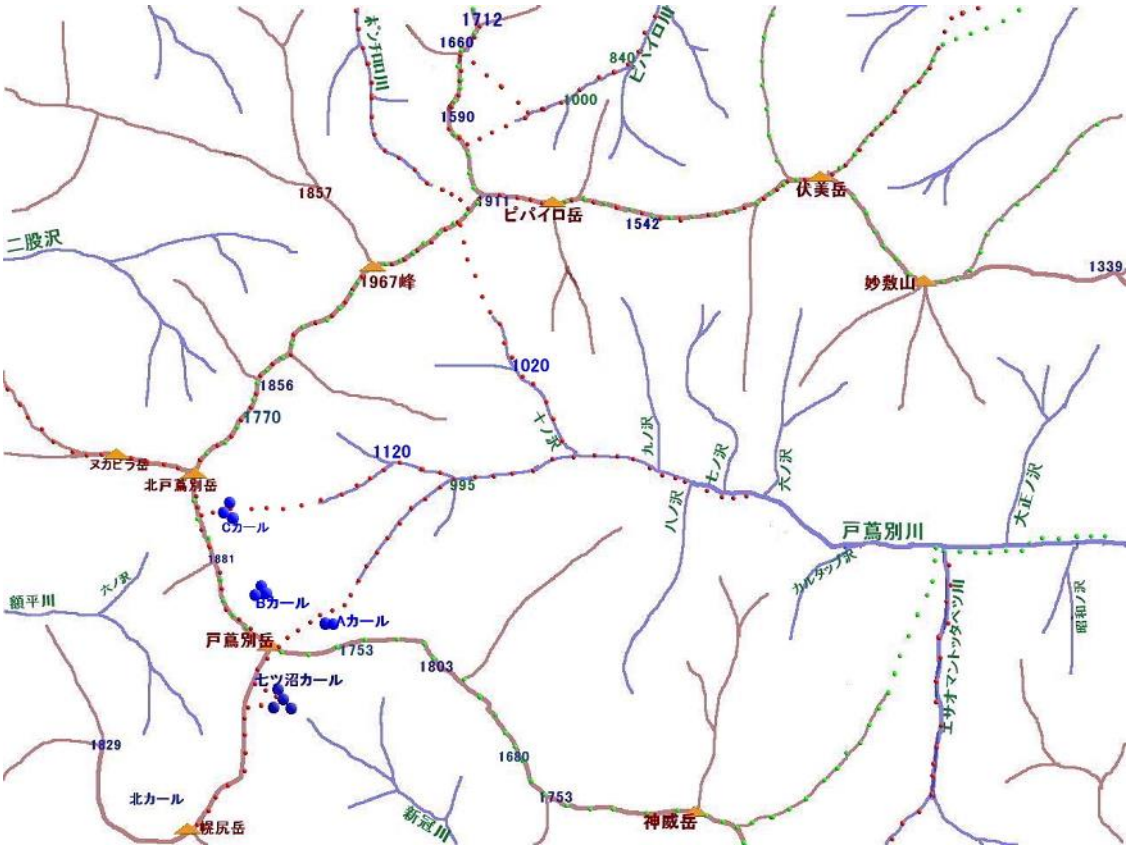
避難小屋近くにも崩落個所

林道ゲートから登山口まで約２時間

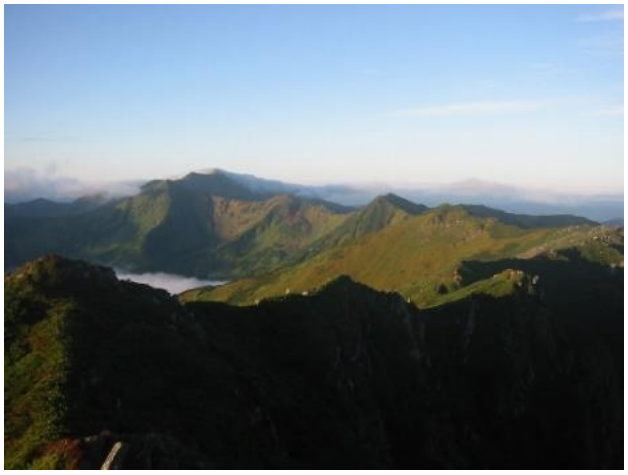
林道を管理している林野庁では、平成 31 年３月から林道復旧工事を進めています。大雨被害を目の当たりにしている者としては、本当に復旧するのかなと思っていましたが、いずれは登山口まで、以前のように自動車で行けるようになるかもしれません。

４　日高幌尻岳への縦走

伏美岳から日高幌尻岳までは尾根で続いています。伏美岳からの山旅を楽しむ例として、かつて２泊３日で実施した日高幌尻岳往復登山を紹介します。



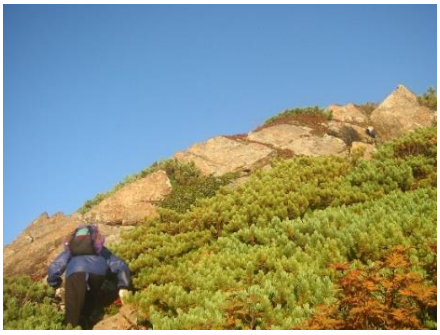
下降すれば水場はあります　熊の気配を感じながらおいしい水をゲット　時期によってはかなり下ります



1967 峰下ったところで幕営

岩場あり、雲海あり

尾根筋から見る雄大なカール



道は明瞭　伏美岳経由で楽しめる

2 泊 3 日の山旅です